〈会員寄稿〉

生涯教育の“根っこ”を考える

熊　谷　和　夫
（北海学園大学）

1．広場の再生を求めて

ヨーロッパを旅行すると，至るところ，観光の目玉になっている有名な広場が目に止まる。中でも，マドリッドのプラーザは壮観である。夜も10時を過ぎると，どこからともなく集まってくる群集がひしめいて，足の踏み場もない。これはお祭り広場である。ビクトル・ユーゴーが，偉大なる劇場と評したブリュッセルの広場は，もっとも華麗な広場である。これらの広場は，place と同義語のようであるが，広場の定義は，一様ではなく，多目的に機能できる場所である。

日本で典型的な広場は，駅前広場である。かつて，駅（停車場）は，この広場をふくめて，コミュニケーションの貴重な空間であった。駅は文化であるという人がいるが，駅はまさに，人間模様の織りなす哀歓を内に秘めながら，毎日息づいてきた庶民の故郷でもあった。わが北海道にとって最大の関心事は，国鉄の解体とローカル線の廃線であるが，これは，地域共同体の崩壊をもまねきかねない衝撃である。

駅と同様に，地域連帯のよりどころとして，その中心の役割をはたしてきたのは小学校である。小学校は，対教師との関係より，神社やお寺と同じように，運動会や学芸会などの行事をとおして，地域社会団欒に格好な場所を用意してきた。とくに，開拓間もない北海道では，その傾向がつよかった。最近，廃校になった校舎を，レクリエーションセンターや生きがいセンターなどに転用する自治体が増えてきた。

また，若ものたちの間で，イベントづくりが盛んだが，イベントは，たんにお祭り騒ぎで終るものではない。近隣住民の集いから，さらに他の地域住民へと交流の輪を広げることによって，音楽，美術，演劇などの創造的な活動や，文化財保護の自主グループ・サークル活動に，専門的に多様化されることが望まれる。

広場は，たんなる空間ではない。時間と空間は一体であり，最適な場に対応するタイミングを，地域住民がどう創造するかが課題である。他方，情報交換の場としての広場の機能は，イギリスのパブにみられるように，社会的になんの制約もなく，通路のような自由な空間に広がることが期待される。

2．役割は出番か

E·H エリクソンのアイデンティティ論が，生涯教育理論に一石を投じて久しいが，私たちにとって，その焦点は役割論の展開である。青年にとってアイディンティティの獲得は，青年が社会に認知されることであり，社会的適応への第一歩ということになろう。しかし，他方，青年の役割定着は，定職という宮仕えに甘んじることにもなり，矛盾は果てることがない。

子どもは，本来，開放された存在であるという人がいる。ところが，大人は，子どもを型にはめようとして，子どものエネルギーの発散をさまたげる。日本の官僚は優秀だといわれるが，官僚制度では，行政の継承性が重視され，いつでもだれもが，その役をこなせる能力が問われる。ここでは，人より組織が大事であり，官僚の保身的性格は伝統的なものである。

このような日本社会のしくみの中で，自由に生きるのは容易なことでははい。単身赴任，長時間労働，わるい労働衛生管理など，生涯教育にとって条件はよくない。したがって，生涯教育は，女性と高齢者のためのものという固定観念が生れてくる。余暇は，文字通り余暇で，休息の時間である。若年層にとって，余暇のすごし方は，ドライブとスポーツの外，何が考えられようか。

一般に，役割といえば，お父さんの役割，お母さんの役割というように使われる。言葉を替えると，日曜参観はお父さんの出番，PTA はお母さんの出番ということになる。はたして，役割は出番なのだろうか。出番には，何か受身の姿勢が感じられる。また，固定的な役割が感じられる。他には，まわり番の表現がある。古くから，日本の農村には，田植のユイ(結)，屋根茸のユイ，普請のユイといわれる共同体の作業組織があった。それは，社会生活を成り立たせるための最低限度の義務である。

最近，生涯教育の学習会で，ある女性が，教育まで生涯管理されようとは抵抗

を感じると発言していた。学習は，あくまで個人のものを強調したかったにちがいない。19世紀の半ばに，市民大学を成立させたイギリスでは，大学が，対外活動を拡大して，市民の学習要求に応ずる継続教育といわれる成人教育を担当する伝統があった。このように，行政に期待される施策は，生涯教育の条件整備である。したがって，生涯教育の観点では，地域社会に密着した生活課題が重視されなければならない。個人，職場，地域社会をふくむ自主的な学習活動は，学校，職場をとわず，市民生活に関する知識理解を中心に，さらに世代を越えて，学習主体の相互の交流に発展するだろう。

3．系統か機能か

学習課題の設定について，ここに二つの対称的な考え方がある。

一つは，アメリカでエッセンシャリストとよばれる学習の系統を重視する考え方である。科学とか，技術とか，文化とかの分化過程には，その基礎に固有な領域というものがある。教育的にいえば，系統的知識とか，基礎学力とか，ミニマムエッセンシャルズ（最小限度の基本的重要事項）になるが，諸科学の成立には，このような本質的，系統的な過程があり，要素的な知識を積み上げることによって，体系的な学習が可能になるというのである。したがって，学習課題の構成で，日常性，生活性，個人性などをことさら強調すると，教材を不当に生活化したり，経験主義的偏向におちいるというのが，その批判である。

このような考え方にたいして，教育の課題は，学習者一人ひとりの個性を理解して，個性ないし人間性の表現を援助することであり，物の見方，考え方，感じ方を土台にして，行動力を高めることをねらいとしている。学習は，いわば手段であって，一人ひとりの個性の開発がねらいだから，その出来高は，最終的には個人に還元されなければならない。このような機能的な考え方には，技術主義，操作主義的偏向をおそれる声がある。つまり，客観的な世界の認識より，情報を単純化し，情報を効率的に処理したりする能力を強調することによって，自己中心的な世界を容認することにならないかという批判である。

しかし，戦前の日本の教育では，要素主義の系統学習により，教育内容の画一化と教え込みの技術が導入され，教授効率を高めるために，一斉授業の方式が定着した。これが，教育の硬直化をもたらし，学歴ないしは学校歴重視の社会を生み出し，社会人の学習意欲を封殺し，生涯における個人の向上心を，体制的に無視してきたのである。

私は，5年前に，イギリスに留学する機会を得たが，イギリスの教育のひとつ

の典型は，トピックの学習にあると私は見ている。ここでは，完結型の教育ではなく，自分のペースで課題に取り組み，いつでも自由に，教師と子どもの学習要求に応ずることのできる余裕と配慮が考えられている。そして，スクールズ・カウンシル（カリキュラム研究所）の最大のプロジェクトは，「戦争と平和」であった。イギリスの教育科学省は，学校と地域との連けいの必要性を強調し，子どもと父母と教師に開かれた学校を目指している。

4．生活にテーマを

人の目に立ちにくい行動は地味で，無償の行為とか，無名の役割とか，清廉な生き方などの形容で表現される。ボランティアの活動は，たしかに無償の行為にはちがいないが，はたして地味な仕事になるのだろうか。ボランタリーは，「任意の」「自由意志の」というほどの意味で，ボランティア活動とは，自分を殺すのではなく，社会的に自分の個性と能力を生かすのである。

地味とか派手の日本社会特有の用語は，権力との距離によってきまるようである。たしかに，ボランティアは，権力からもっとも遠い位置にある人たちである。手話通訳とか，点字技術者は，その典型であるが，これを，地味な仕事，目立たない仕事だとはいえない。女性の役割として，社会教育，社会福祉ボランティアは，国や地方の福祉機能を補完するものではあるが，コミュニティづくりの一環として，女性の生きがいをささえる活動になろう。これは，美しい老後を生きるために，配偶者としての夫との適応をはかる上で有効である。

私事で恐縮であるが，私は，いま，高血圧と脳血栓で療養中の身であるが，私の生活のモットーは，「病気を楽しもう」である。私は，つねに食事や運動に気をつかっているが，それなりの効果に気を強くしている。生活にテーマをもつことは，理由のない老後の不安から，自分を解放することにもなる。